

---

# アラユル世界での彼女の嘆きの挽歌

youandAi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アラユル世界での彼女の嘆きの挽歌

### 【ISBN】

N8499E

### 【作者名】

you and A.i

### 【あらすじ】

なんだかすげーへんなことがおひつですぐくなるすげ

\* : 「」はふりがなであります。

@ : 序文とこづな田の戯言

私の世界はね、つまりはね、この世は薄情なんだよね。まさに薄っぺらである。それはまるで貞「ページ」のようなんだ。

それが重ねあわされ製本されて、本となり、そこらの書店で売られたり、秘密裏に地下出版されるのだ。同人誌も、また然り。

本の貞には、ほとんど同じ内容が書かれている。それが何冊も何冊も存在する。続編もある。勿論打ち切りもある。悲しいな。

それは何枚も何枚も無限に重ねあわされた、世界の概要であり、一刻一刻と変化を遂げる、文字の禍「うず」だ……あはあは、どけらも同じ事だなあ。

ジャンルで言うならば、愛だ恋だとのラヴロマンス、血塗られたサスペンス、かつこによいSF、妄想爆発ファンタジー、難解なミステリー、おそろしいホラー、懐郷のノスタルジー、あとはみんな猥文でとても卑猥だ。

それら、それぞれ、すべてすべて收められ、みんなみんな同じ時を刻むのだ。  
しかし、その本も世界構成の中核たる、物理法則からは逃れられないものでした。

つまり汚れ、角が欠け、紙が破れる。印刷時の誤字なんかは、特に顕著に文章を破滅させる。

間違いだらけのモノクロに彩られた貞は 本は、荒唐無稽

で、意味不明である。

たつた幾枚数冊のそれらは、専門ショップのいつもうずたかい平積みのなかに潜んでいるのだ！

因みにこの話は、一応SFだと言つ事を通告しておけ。

@…本編開幕

彼女は、そこに一人、立っていた。因みに彼女といつのは、『私』のことだ。

『私』の名前は、笹井晶「ささいあきひ」。職業は学生。それなりに引籠りがちだけね。

物語序盤だし、名前からだけでは分からんだろうで、一応言つておくが、性別は女。

読者「プレイヤー」である貴方には、関係ないけど彼氏はいない。私には大いに関係あるけどねっ！

まあ、開始直後の脱線は此れまで　以下、本文開始。

私は、これは夢であると自覚はしていた。

なぜなら私は寝ている　我が安らぎの四畳半にて栄光の精眠を貪っているからだ。

目が覚めたら、マクラのもとで労働基準本が何であるとかと言つほど酷使され続けたノートパソコンが馬鹿になり、

明鏡止水のブルーバックを輝かせ、その薄明かりのスポットライトにて、病的にまでの歡喜に満たされて眠っている私を照らしている事は想像に難くないのだ。

夏休みの友と言つ名田の宿命の期限が学生の横を怒号疾風に過ぎ去る日時は今より2日も先の話である。

私は修羅場で散つた若き戦士たちの屍「しかばね」の上を悠々と

踏みつけることであらう。まあ！

しかしそんな歴戦のツワモノもやはり、この状況には、「此れは無いだらう常識的に考えて」と思つばかりだったのだ。

私の目の前は、石ばかりだった。硬い玄武岩で建造された巨大な橋の端に私はいた。

棚干を覗くと、考えられないほどの高さだった。地上には大きい巨石建造物が乱立していた。

屋上には黒い点がいくつも動いており、此処の住人かと思われた。さすがに良くな見えないが、ヒトではないは確かだ。

灰色掛かった空には、余りにも滑稽な、2つの脈動する、太陽が浮んで、生物的な湿気を出しながら、発光していた。

これらによつて、此処が凡「おおよ」そ地球ではないことが分かつた。もともと夢であるのだから、そんなの関係はないのだが。棚干にそつて歩いていくと、腕を広げたヒトデと蛸を掛け合せたような形をした小像がぽつねんとあった。

触るとポキリ音がして私の手のひらに。私はその小像を見ていると、なんだか厭な気分になつてきた。

ボットその場で突つ立つていると、何処からか現れた濃霧がいつの間にやら私を取り囮んでいた。

もやもやと浮かび上がる黒眼鏡「サングラス」をかけた老人。彼はゆつくりと、私のもとへ歩み寄つてくる。

いや、歩み寄るというのは間違いだ。何せ足が無いのだ。膝下から急に薄くなつて消えていた。

そして老人が言つ。だが何をいつているのか分からない。テープを早回しにしたような、甲高い音が途切れ途切れに聞こえた。

どうやら、老人は異国の　異星の？　言葉で語りかけてきていたようだつた。

わけもわからないのに、老人がきいきい捲くし立てるので、はあ、ええ、などと適当に相槌を打つていた。

その後、老人は満足したようで、此方に手をぱたぱた振った。私も手をぱたぱた振った。そして逆回しをしたように、老人は、もやに還つた……。

老人が居なくなる。何も居ない。いないいない……、一瞬沈黙……聴覚のブラックアウト。

濃霧は消え去り、闇だけが残る。足元の岩の橋、その下の世界、空の心臓、何もなくなり私は闇黒に立っていた。

これで覚醒であろうかそれとも、まだ続きがあるだろうか。

そんな事を考えているとやはり、まぶしい朝日が見えるのだ。だからこれは夢なのであつたのだ。

それから私は覚醒し、うんと言つて背伸びをするのだった。

@・田が覚めてからする事は

やけに眩しいなあと思つていたら、カーテンを閉めていなかつたからであつた。

私の一日、ぶりの安眠を、揺るがすほどのその光量は、量子力学的に言えば思い込みなのだそうだ。

だが思い込みだなんだろうが眩しいものは眩しいのである。充血した目を腫れぼつた眼で閉じ、私は盲目のままカーテンを閉めた。天井裏では、私がおきた事を知つた大きなねずみが、大きな腹をつつかえながら這いまわつている。

垢じみたシーツにくるまれた万年床に再び身をくるませたところでヤツト氣づき、私はあわてて時計を見る。

「朝かと思つたが、起きてみたら、真昼でした」

これはやられた。太陽神「ラー」は、時の神様「クロノス」までを狂わすのかもしない。

「そうだ。今日はバイトだ。早く行かなくては怒られるかも知れんというか、クビである」

携帯電話を見ると、メールがきていた。案の定の内容だった。

「ギャッ！」と漫畫のように叫んだ私は、急いで着替えて謝りに行かなくてはと、狭い四畳半を駆け巡り、

布団の足元にはコインランドリーで洗濯してそのまま持ってきてうずたかくつまれ、使つたり使われらなつたりしたシャツやらナンヤラから着替えを探し出し、「おおあつたあつた」なんて喜んでいたのも束の間、私の足元 布団は一面、血に染まっていた。

足元と言つてもこの四畳半 正確には六畳で一畳半は玄関と押入れで構成されている は、

いまや血塗られた布団を中心、勉強机代わりの小さな丸いテーブル、湯を沸かすしか能の無いポット、

粉珈琲の空き瓶、酒の空き缶、しょぼいノートパソコン、そしてそれらを取り囲むように本棚がどかどか立っている。

嗚呼ア、律儀に乱立しせり環状本棚とそのお供。

汝らは不淨都市レムリアと呼ぶにふさわしいだろう。臭いからね。締め切つたカーテンからの木洩れ日に照らされ、空中を優雅に舞うチリが律儀にきらきらと反射していた。

その天井に呆然と取り付けられた場違いな文明的クーラーが哀愁を誘う、ダメ人間の部屋だつた……。

話を戻そう……。

ビックリした私は倒れ、尻もちをついた。痛む尻を摩りながら、階下の住人に謝つた。

そしておそるおそるパンツを触ると、ぱきぱきと粘度の高いものが乾いて固まつた音がして、赤い粉が指に付着した。

私はまたやつてしまつたと、ため息をつき、パンツを脱ぐ。蛆虫色のおりものが糸を引いていた。

「やばいなあ。今日は生理の日であつたことをわすれていたよ

私は特に、生理に痛みを伴わないたちであつた。レバーになる事も、あまり無い。

だからたまに忘れてしまつ。そしてこいつ言つ事態になつてしまつ。こう言つ事態というのは、一面 といつても布団が真ん中に永くに居座る上 に

殺人事件「コロシ」でも起きたのかと思わせるような惨状が繰り広げられる、即ち今のような事態のことである。

実際に、友人がこの惨状を目撃した時、卒倒し、倒れて手すりを乗り出し落ちそうになつた事がつた。

何事かと駆けつけてきた階下の住人Aは、何か勘違ひしたらしくおもむろに携帯電話を取り出した。

そうして危うく、犯罪者にされてしまつところを、「ちがうんですね」「と弁解したことはもう、恥ずかしくて、思い出しあくも無い。

あ、思い出してしまつた……モウ、ハズカシイヨ！

また話がそれてしまつた。…………。

さて、私は起きてから一度目のため息をつき、汚れたシーツを布団から剥いでビニール袋に入れた。パンツも勿論入れた。

タオルで身体を清めから、先ほど掘り出した服を着て、たたみを雑巾で拭き、やつとこ一段落ついた。

私はもう、落ち着きを取り戻していた。経血の事ではない。バイトの事だ。

「もう、クビは確定である。謝つたって、ダメであろう。あのバイトは繋ぎだ。次なる目標のための糧となつたのだ！」と思つよう

にしていた。

しかしながら、少しばかし涙田なのは、尻が痛いだけではない。

額に流れるひとしづくの汗を袖ぐちで拭い、コインランドリーに行く事に決めた。

こんなにして、此処に置いておく訳にもいかない。洗濯物も、溜まっている。

私は先ほどのビニール袋に、その他の洗うものも入れた。もちろん多い日も安心なものを着けるのも忘れない。

急いだので突っかけが上手く履けず、階段から半分ほど転げ落ちた。また漫画のように、「ギャ！」と叫んだ。

尻餅につぐづく縁がある日である。いたいいたいと尻をさすつていたら、何事かと階下の住人が駆けつけてきた。

彼は、私の手に持ったソレを見るや否や警察に電話しよつとしたので口を塞いで電源を切つてやつた。

そしてまた、「ちがうのですちがうのです」と弁解し、今度は自室にから、雅貴に貰つたカステラを一本持つてきて階下の住人の口へ押し込んだ。

彼は二コ二コと恵方まきのよう、それを貪り始める。これで5日はもつだろう。一人身の分際でカステラをまる一本齧ると言う屈辱を存分に味わうがいい。

さてと……見上げる空には風に流された飛行機雲が消えかかり、

少しばかり西に傾いた太陽が「おれはまだやるぜ」

と言わんばかりに燐然と輝いていたので、私は眩しそぎて逃げた。そして裏道のほうからからいくことに決めた。

歌を口ずさみながら、私はイチョウ並木を進んだ。黄色くなり始

めの葉っぱが風に吹かれて、いまだ青い実を揺らしていた。

無論、まだ臭くない。もう少し寒くなり、朝早く此処にくれば、

近所の老人が、せつせと一心不乱に銀杏を拾っているだろう。

そして今のように真昼を過ぎた頃は、彼等は家でご飯を食べているか、ゲートボールに精を出しているのであろう。夫婦水入らずで。将来は自分もこうなりたいと思う私だつた……。嗚呼ア 悲めみじめ……。

「穢れのないーー その瞳に 映るは遙かー中華の地ー！」

私の口からは、何度も同じフレーズが繰り返される。多少古い歌だが、私は気に入っている。

私は寝起きですぐに動いて、咽喉が乾いていた。

途中に自動販売機が在つたのでそこで、ジュースを買おうとして立ち止まり、ビニール袋を地面に置いてポケットから小銭を取り出す。

「なにを買おうか。迷つた。ん、これは何であろうか」

私が見つけたのは、なんだか懐かしい気持ちになるデザインの缶ジュースであり、名を、『過去コーラ』とあつた。

よくみてみると、自販機自体もなんだか古風というか古臭く、売られているのが、過去に流行つたことがあつたような、いまだ見ぬ未来に流行りそうな気がする、見るからに雑多であり、およそ統一性が無い。古臭い上に胡散臭かつた。

そういうば、ココを何度も通つたが、こんな自動販売機を見たのは今日が始めてだ。

最近に置かれたのなら、もっと新しいデザインなはずで、実に、奇妙だ。

だが私はそんな事、お構い無しなのだ。

「まあいいわ。ジュースはジュースだよ。多少古くたつて、大丈

夫。あたしのおなかはじょうぶだもの」

投入口に一一〇円を入れ、ボタンを押す。と、件の『過去コーラ』がごろりと出てきた。

私は腰をかがめて取り出し、その冷たさに頬擦りした。

「秋になった、というのは嘘つぱちではないか」と言われるでも毎年言われるような気がする そんな近年。

それは一酸化炭素だけではなく海中の『めたんはいどれービー』と呼ばれる物質が原因だそだが、

テレビで見ただけなので、『めたんナニガシ』が一体、どのような悪さをするのかを、私はわかつてはいない。

だが、そういうしつたかを言いたいのもヒトである。私は凡人だつた。

しかしたまに吹く、木枯らしが、ひゅうッヒュウ、通り過ぎる時だけは昔と変わらなかつた。

私の去つたあと、金色まがいの葉っぱが、風に飛ばされ、あやふやな秋空に舞い、散り、どこかに消えた。

そして飛び散つたイチョウのように、古臭い自動販売機も忽然と姿を消していた。

代わりに、熱せられたアスファルトから、陽炎めいた霧が立ち上り始めていた。

どこかでねずみが、チュウと鳴いた……。

@：なんか変な感じ

『インランドリー』について、私は血まみれの洗濯物を放り込み、蓋を閉め、小銭を入れた。

『いんじうん』と洗濯機が回転し始めるのを確認し、先ほど買った『過去コーラ』を飲もうとプルタブをあけようとした。

その時、成分表示なにがしが書いてあるはずの欄が、すっぽり消えており、代わりに危なげな髑髏「どくろ」のマークがはいつていた。

注意書きもあった。私はそれを声に出して読み上げた。客が他にいないので、声の大きさを気にする事は無い。

「『おいしくないです』……莫迦か？」

そんな事、缶に書くやつがいるだろうかと。しかし現にその症例があつた。これが現実だ。

味も、現実だつた。實に、まずい。しかしそのまずさが癖になる者も出てくることは、想像に難くない……。

5分後に飲み終わる。私はげっぷをし、手をパタパタ振つた。いつもはげっぷの息を、どこか遠くへ散らすためだが、今日は違つた。妙に気温が高く感じる。

室内の壁掛温度計をみると、29度とあつた。温暖化此処に極まれりである。

端のテーブルの上に、先ほどは気付かなかつたが週刊誌がおいてあつた。

1ヶ月ほど古いものだつたが、真新しいような感じを讀んでいる。暇つぶしにと椅子に座り、足を組む。私は置き去りにされた雑誌を読み始めた。

（

『先月始まつたアニメの特集。人気の新刊。漫画。みかん。漫画。広告小説立ての猥文。卑猥な写真。

袋とじ。広告。流行ファッション。広告。広告。美味しいもの。

古今世界の状況。みかん。広告。小説神芥川。

寒い秋についての注意事項。ガンダム。おいしいはつさくのたべかた。エヴァンゲリオン。ファンタジー小説。引籠り。

有名人のエッセイ。あの人は今。太陽系外進出。だいこん。現

在の月基地生活の特集。月にいるウサギ。みかん。ウサギになった地球人。

未来SF。今月の天気。今日の運勢。猥文。偉い人の言葉。みかん。自作パソコンについて。猥文。読者投稿。広告。みかん。来月の特集。広告。エトセトラエトセトラ・・・』

雑誌を読み終える事になると、洗濯機の回転は止まり、脱水と乾燥も済んでいた。

私は持ち帰り用のかごを借り、そのなかに無造作に、洗われて真っ白になった洗濯物を入れていく。

「これは借りるんだからね。何時か。返しに来るんだからね」と私は言っているが嘘であろう。

このかごは借り物なので、当たり前だが、また後で返しに来るのだが、何故か私の部屋の押入れに一つあるので、これもその仲間入りをするのだろう。

押入れの先住民は、まだ8月頃に、雅貴「まさき」と一緒に部屋へお持ち帰りされたものである。  
つまり今は9月であるから、1ヶ月も洗濯をしていなかつたのであつた。

去る8月、雅貴に「おまえは女の風上にも風下にも置けないわ」と罵「ののし」られたので

私は「では穴倉に籠つて仙人になろう」と返した。友人はため息をつきながらも、私の部屋の片付けを手伝ってくれた。

因みにその時押入れには先住民がたくさん繁栄を極めていたので、彼に阿呆「あほう」と小突かれた私はしぶしぶ、コインランドリーに強制送還した。

その帰りに連れてきた一人にも、雅貴は「帰れよな」と通告したのだが、私はあいもかわらず知らん顔でやり過ごした。

雅貴は溜息をついた。溜息をつくのは彼の癖である。

話を戻す。

ふたたび越境を余儀なくされたかごを手に、私は、コインランドリーの扉を開ける。もあーっと、熱気が真夏のように押しかけてくる。

なにやら暑過ぎやしないだろつかと思つたが、なにせ私は引き籠もりがちである。クーラーの効いた部屋でぐつたりするのが毎日だ。ご飯は深夜のコンビニ弁当一回で済ます。だからお昼2時位はこう言つ熱気なのだろうと引き籠もりがちの私は思い、歩を進めた。

のんべり歩いていくと、熱さにうだれる人々が、寒冷の地を求めてゾンビの如く彷徨つていた。

彼等の脇をすり抜けるたびに汗の匂いがした。私もそんな匂いがするのだろうかと確認すると別の意味で臭かった。

自室に籠つていた4日間、一回も風呂に入つていなかつた。髪の毛はぼさぼさで、みつともなかつた。

「風呂に入らう……」

流石にこれはと、私は本田三度目の深い溜息をついた。

@汗臭い話に山なし落ちなし意味なし

帰る時、私は別の道を通つた。その際にある銭湯へ行くためである。

夕時から夜明けににぎわう此処も、昼間なので他の客はない。番台にも誰もおらず、ただ招き猫がちょこんとすわつていた。

「いやー」と呼びかける私だが、招き猫は知らん振りだ。

私は猫背の箱に大人一枚の代金を入れ、女湯の暖簾をくぐつて行つた。

その時、私の後ろにねずみがちょろちょろ着いてきた。言つまでも無く私は気づかない。

招き猫も、手で顔を拭うだけだった。

何年着たのか分からないクタクタによれたTシャツと色々ちしたジーパンを脱いで籠に入れ、シャワーを浴び、備え付けの石鹼で身体を洗い、かけ湯をして湯船に浸かる。

「あ、あ、-----」

私は本日四度目の溜息をついた。驚くべき事に、このバケモノのような叫びも、溜息の一種なのだ。

しかしこれは今までの後悔のものではなくて歡喜のものである。じいーと、湯から立ち昇る穩「おだ」やかな蒸気を見ていると、ふと、今日見た夢を思い出した。

「あの巨石建造物、玄武岩で出来た橋、遠めに見た黒い点々、奇妙な小像、濃霧にまぎれた老人……。

この、今でもはつきりと思い出せる夢は、どこかで見たようなモノばかりだなあ……」と苦笑する。

昔、80年あまり前の小説家におつかない話を専門に書く人がいた。

彼は様々なものを書いて色々な人たちを恐がらせたすごい人だ。彼は、『クトゥルー神話』と呼ばれる架空神話体系のおおもとを築いたことで有名だ。

その宇宙的恐怖に魅せられた者らが、「ぞつて我先に」と書き足し、足して、足して、どんどんとその神話は脹らんでいった。

そして、またまた色んな人を恐がらせた。所詮架空の物語で在るが、どれも現実味を帯びた文章で綴「つづ」られており、まさか本当か、と思うようなところもある。

その神話中に、私の見た光景に似たものが存在するのである。

「だがあれは夢だ。宇宙的恐怖は空想だ。プロヴィデンスの少年が魔〔うな〕された悪夢は、所詮夢で、それを彼が書いた作り物なのだ。

だから邪神などいないので。ヒヤデスのあいつもいないので。よつてあの先生もいるはずが無い。

だからあんなところは現実には存在しない　だが、だがだが、少年が悪夢を見て魔された、と言うのは、紛れも無い事実なのだ……、恐ろしい、恐ろしい宇宙的恐怖、そして、近隣で起こる殺伐とした感じの悪い悪夢が、あたしを包み込み　！」

私は、そんなこんな妄想を振り払うべく頭を振り、濡れた頬を叩いた。

「ぺしんぺしん！」

だが空想は着実に妄想へとつながり、妄想はさらなる白昼夢へと繋がる……。

@・なんか変2

私は、自分の部屋にいた。

ドウシヨウモナク窮屈な、布団を押しのけ、机に向かう。

書きかけの同人誌、飲みかけの「コーヒー」、それを見る目を充血させた私。

それらを照らす輝くモノのは、スタンダライト、イーノートのブルーバック、カーテンから零れる微かな月明かり。

聴こえるものは、『鍵』であった階下の住人の詠唱の声ばかり。

左右の部屋には誰がいたかもう分からないし、分かる必要ももう無

い。

頭が変になりそうな、否、もう充分変になつているこの空間にいるのは、私一人ではない、もう一人がいた。

雅貴がいた。開けられることの無い、押入れの中に居た。押入れの中で、生きているのか、死んでいるのか、分からぬ存 在となつた彼は、彼女に向けてふすま越しに微笑んだ。

また私の方も彼へそつと微笑みを向けると、服を脱ぎだした。

表れる白い肉体、太陽を浴びていらない無垢なる身体、純潔を保つた少女の裸体、だがそれは、純潔でりながら汚れている、邪悪の塊、宴会の肴。

残りの冷たく冷えたコーヒーを咽喉に流し込んだ私はカーテンをくぐり、立て付けの悪い窓を開ける。あの秋の、心地よい寒氣は、もう感じる事は無い。

鼻につく、燃えても燃え尽きる事が無い、煙の臭い。  
考えられ得る全ての甲殻類の、腐った臭い。

何かがのたうつ生物的な、擬音。

世界に悲鳴はもう、聽こえない。

待つっていたかのように粘液を纏つた触手が、私を下宿の屋根に持ち上げた。実際待つっていたのだ。

眼前に見える、天球を突き刺し聳「そび」え立つ卑猥な形をしたものは、異界の灯台だ。

それは此処に元はもつと一杯ナニカが居たと言う事を残し続けるたつた一つの証拠。

他はもう、崩壊し、すでにその瓦礫も砂になつた。

屋根に降り立つ、私。ベニベニとへこむ、トタン板。触手は凄まじい臭気を放ち、先端から粘液を噴出する。

私へぶつ掛けた自らの桃色がかつた白濁をみて興奮したのか、い

つそう怒張する触手たち。

のたうつ肉棒はなおも数が増え、下宿を飲み込み、さながら尻からでた寄生虫を思わせた。

「嗚呼あ、、、、ふんぐるいふんぐるい、、、、」

淫猥な音を出す、私に纏わりつく触手たち。

何本も何本も這い回り、足を、腿を、陰部を、腹を、胸を、首を、口内を、頭を、舐め回し、嬲り、弄り、姦「まわ」す。

しかし私は一向はいままでどがれらめすと同じな退屈で光のない、絶望を超えた瞳で、針のように細い月を、見上げていた。

「こんな世界を望んでいたんじゃないのに。頭がまづくんで一杯だ。嗚呼〔こあ〕ア、嗚呼〔こあ〕ああああ……、」

晶は諸手を挙げて叫んだ。涙が溢れても、最早粘液と見分けがつかない。

呼応するように触手たちの動きが加速する。ついに蟲達が私の胎内へと入つた。

もつと刺激を！

モードの発達

嗚呼、もつと、感じて居たかつたけど、

感しない 貴方の身体は感しない  
でも貴方の心は、あたしと一緒に生きている！

嬉しい、ウレシイ嬉しいワ！

アハハア×アアアアハハアアアアアハハア×アツハアアアア  
アアア×アアーアアアアアアアアアアアはつはああ×はあい！……！

触手の一部となつた私は、持ち上げられ宙に浮き、絶え間ない振動と、蠕動を、繰り返す。

快樂によりて、痙攣を繰返す私。鼻からは鼻水が、ダラシナク開けられた口からは涎が、依然として流れる涙、汗、膣分泌液、赤い血液。

それらは触手の吐き出す粘液に混ざり、形を変える。全てを舐め盗つて行く触手。私からナニモ力モを奪い取つていく触手。私にはもう、何も無い。だから、彼等に快樂を与えて其れを返さなくてはならない。

犬の陰茎を伸ばしたような触手を口に頬ばつた。それはすぐに咽喉の奥へ、自分から入つていった。

どりりとしたねばねばが、肺に直接注入される。すぐに咳き込み、吐き出す私。自分自身の味がした。

嗚呼あ、あああ、アアア嗚呼あ、体感的な官能が全身を駆け巡る。

ドウシヨウモナイ体の疼き、求めるものはもう無いのに、もう、手に入らないのに求めてしまう、もう諦めていたのに、全然諦めさせてくれない。

希望なんていらない、絶望もいらない、欲しいのは沈黙、白い闇、真つ白な、真つ黒な、やがて来る、やがて降り積もつただろう、雪の結晶が汚れに犯されるような、……。

でも貴方を感じるコノあたし心だけは、摑らないで下さい、お願イしますウウウ。

あ、あ、あ、い、い、い、これは矛盾？……ドウだらうね

.....以下続考。

嗚呼あ、あああ、アアア 嘴呼あ、 嘴呼あ、あああ、アアア  
嗚呼あ、 嘴呼あ、あああ、アアア 嘴呼あ、 !  
嗚呼あ、あああ、 嘴呼あ、 嘴呼あ、あああ、アアア 嘴呼あ  
、あああ、アアア 嘴呼あ、アアア 嘴呼あ、アアア 嘴呼あ  
、アアア 嘴呼あ、

.....ほああーいあ。

狂乱は、途切れても一瞬。そしてすぐに再開する淫猥な宴。それは永遠に永劫にどこまでもどこまでも……求め続けて求め続けないしかししかしどうにも矛盾でアアアアアア　いあいああああ！！

《プルドーベイ》  
《それは油田》  
《プルドーザー》  
《それは重機》  
《AK-47》  
《それは銃器》  
《ばばばん、ばばばん》  
《劇団員はみんな撃ち殺された》  
《みんな幸せに死んだスイーツ（笑）》  
《幕閉じ》  
《再開幕》  
《ビー》

----- ブザー音 -----

@違う、何かが違う.....

意識が戻ると、私は布団に寝ていた。見慣れた下宿の部屋であった。

私の椅子に座つて溜息をつく男がいた。友人だ。名を狩野雅貴「かのうまさき」と言つて。

雅貴は、私が起きたことに気がつくと、椅子を回転させ、私の方へ視線を向けた。

「キミは本当に馬鹿だなあ。人の家「ひとんち」ならまだしも銭湯で寝るなんて、最近の駱駘「らくだ」でも思いつかん。

そして汚いこの部屋は何だ？ 今度来て掃除をしてやる

あの銭湯は、彼の家で経営をしている。私はのぼせて気を失ったのだった。

「ふん。ではあたしはペンギンになつてやる。空は飛べないから氷の下に籠つてやる。お前が来るまで出てこない」

「この引き籠もりめ」

「あー貴様あ、あたしをいじめたないじめたな？ いじめられて絶望した！ いじめるやつは愛護団体に引き渡すぞ」

「それは大変だ。ペンギンを守るべき騎士は、彼女の住処の汚染を防ぐべく明日は、掃除に明け暮れるだろう」

そんなやり取りを何べんか交わした。私がかなり元気なことに安心した雅貴は、

「冷蔵庫に珈琲牛乳入つてあるから飲んじゃダメだよ？」 と言つて残して去つた。

彼が帰つたあと、疼く頭を抑えながら立ち上がり、

「だがあたしは開けるのだ」

私は天邪鬼だ。なので言われた事を無視して冷蔵庫を開けるのだ。

だが冷蔵庫の中には、珈琲牛乳ではなく、ポカリスエットが入つ

ていた。

天井裏で、ねずみがチュウと鳴いた……。

@ …これも愛なのかしらん

プシュー、と音を立てて窒素ガスが出る。キャップを外し、そのままがぶ飲みする。頭はまだくらぐらした。

テレビを見ようとパソコンをつける。この部屋には、家電製品のテレビは無い。

シャープのローブの後Windows7の起動画面が出た。『まさかこんな骨どり品を使っているのは私くらいなものだ。

私のイーノートは、いつも止まって青い光「ブルーバック」で室内を照らすことを生業「なりわい」としている。

デスクトップのアイコンをダブルクリック。アプリケーションが起動され、デスクトップの上に窓が出て、ニュースが始まった。

『今日は猛暑でしたね、隣の女子アナさん? では8月9日の今田のニュースワイド……（『』）

「はて、ききまちがいだろうか。たしかに今日は8月9日と言ったような……?」

私は首を捻る。なんども繰り返して『今日は暑いですねあついですね』『今日は、8月9日』とキャスターは言つのだ。

もしかしたら、「録画放送を見ているのでは無いか」と思ひ、チャンネルを変える。

読み込み時間の後、同じような顔をしたニュースキャスターは言った。

『今日は猛暑でしたね、隣の女子アナさん? では8月9日の今田のNHK-MADニュース……（『』）

ヤハリ何かおかしい。8月9日で『今日は何日か』を検索す

る。結果は案の定だ。

もしかしたら、時間を戻されたのかもしれない……。即ち 時間跳躍「タイムリープ」。

しかし、コノ時間帯、私はナニヲしていたか……。

そうだ。今日のこの時間、私は独りですやすや寝ていたのだ。記憶と現状に矛盾が起きた。

確認のために、私は押入れを開ける。玄関に放置された満杯の洗濯かごと同一のものが、たくさん不法滞在していた。

彼等は、来「きた」る8月10日に強制送還される身の上だった。

SFでは、時間航行をする話が数多くある。

マッド博士がそういう機械を作った、ラベンダーの臭いをかいだ彼女のいとしの彼は未来人だった、

ある日起きたら超能力に目覚めた、かのじょが願つたから、神様の気まぐれ、

階段で転んだ、実は死んだ後の世界、さらに宇宙人の陰謀説、さらにはその宇宙人はサラリーマンだった、

時間跳躍じゃなくてパラレル世界だった、宇宙的恐怖、などなど、エトセトラエトセトラ……。

そしてたいてい良い結果にならない。なぜなら『タイムパラドッキス』が起きるからだ。

時間の航行が乱され、混沌たる宇宙の泡沫「ゆめ」である時間軸に守られたこの世界の因果律が狂い、

観測者と被観測者の関係やらなんやら、それらの相対性が濁流に呑まれた様に一気に崩れて流るので

世界は崩壊を始め、もとから過飽和である水溶液に現れ出「い」でた結晶である物理法則のとつてつけた外皮を哀れにも丸裸にされて根幹からちよん切られる。

嗚呼ア－悲劇だ。最早それに縋「すが」るしかなかつた人類は、生き物は、森羅万象自体、世界は一体、どうなつてしまふのか分か

らないがどうかなつてしまふだろ。

再び混沌の秩序は沸騰を開始して、我々の世界を溶かし尽くし、自らの不確定の法則の内に仕舞つてしまふのかもしない。

「この二つの矛盾が、混ざり合つ事無く存在する。それは、世界は概念的に一本道ではない事を示す。

もし一本であれば、あたしは前の記憶を忘れているか、今の記憶といつしょくたになつて、次第に薄れて、忘れていくはずだ。

だが、あたしの記憶は鮮明だ。慄然と固体と化し、混ざる事は無いだろうそれについてはあたしは、あたし自身に照明できるのだ。

しかし、この先、さらなる矛盾がおきると、危険だ。何か起きるだろ。だから、気をつけよ。

世界のほうも、あたしを味方してくれるのはずだ。きっとそうだ。なんとかなる……さて、明日は、何が起きたつけ？

幸い、矛盾は少なかつたようである。

私は絶滅危惧種であるSF者だった。しかしその割には、説明がおろそかである。

私は自分がSFの主人公になるなんて思つても見なかつた。

だがそんなこと本氣で思つてゐるやつがいたら、そいつはただの馬鹿モノで、唾棄すべき存在だろ。

今回の、私の頭の中に慄然と存在している、『あたしは一人で寝ていた』『あたしは雅貴と一緒にいた』という矛盾「パラドックス」。

この二つの記憶が互いに交じり合つ事も何も無かつたのでそういう壮大なことは起きていないようである。ダカラ安心した。

「大学の夏季休業「なつやすみ」も残り少なかつたではないか。これでまたかなりを遊べるじゃあないか。これは得をした。得をしたぞ！」

と晶が喜ぶのも束の間、この時、まだ論文は書きかけであった。またの大作を書き上げなくてはならないのだ。晶は湿つた万年床に突っ伏した。

枕もとに空いたお酒の缶が並んでいた。「ごみ箱もやまもりで溢れており、最早、この部屋全体がごみばこだった。

更なる圧迫を齎「もたらす」す環状本棚の中でも平氣で住める女は、ここにいらでは晶くらいだらう。

そりだ晶は考える事もしない馬鹿ではなく、圧倒的な阿呆「あほつ」だった。

「そりいえば言つていたな、明日だ。明日に、雅貴が、あたしの家に、掃除しに、来るんだ……」

私は溜息をつき、薄いせんべい布団をかけて寝た。

S F 者はたいていの場合、身に降りかかる厄災が少ないと「大丈夫」と樂觀する。

……それもどうかと思つがね……。

翌日になつて、起きてみると、床一面　といつても布団が真ん中に永久に居座る上だが　が血まみれだつた。

「歴史は繰り返される、時間は簡単には捻じ曲がらず、修復されていくということか」

私は自分が生理だということを忘れていたところとは露ほど思わない。

寝ぼけ眼で少し待つ。すると、雅貴が来た。鍵の壊れたドアを開け部屋に入った彼は、その惨状を見るや否やビックリして腰を抜かした。

そんな雅貴に私は言った。

「へつへつへ、多い日も安心！」

「多すぎだらうよ、常識的に考えて」

雅貴は常識的だった。

今回、彼は手摺りから落ちそうにならなかつた。ので、階下の住人も駆けつけなかつた。そういう風に時間は書き換えられた。

私にはその方が都合が良かつた。流石に同じアパートに暮らしている人にその後ずっと、不信がられるのは嫌だもの。

「まあ順調に時間が進んでいるのだからいいだろ?……、ああー雅貴いー、こっちも拭いてくださいよ」

私と雅貴はせつせと掃除した。だがだいたいのせつせは、雅貴のものだつたのだが……。

空き缶も、溢れたゴミも、全部袋に詰めて、ゴミ捨て場に棄てた。掃除が終り、私と雅貴は、コインランドリーに向かつた。二人とも、白いかごを抱えていて少々前が見ずらかつた。

表通りから行こうとしたが、今日はやけに、車が多くかつた。事故があつて、通行止めらしい。日差しも強かつたので、イチョウ並木の方から行く事にした。

しかし突然、表通りの渋滞に耐え切れなかつた車に、並んでいた二人は吹つ飛ばされた。宙で弧を描いて、激突するアスファルトに顔面を削られる私はしかし、生きていたのだが、もう長くは持たない。もう持たない。すぐ死ぬから。

雅貴は、すで死んでいた。即死だつた。胴体が二つに折れ、頭から血と脳髄が噴出していた。

私は絶叫した。しかし音は出ない。グシャグシャに咽喉が潰れていたからだ。

その声にならない声が、胸の鼓動と共に、排出される血と共に、小さく小さく、潰れていつて終「つい」には消えた。

ねずみの声が何処からか聴こえたが、それもまた同じように消え

た。

代わりにどこから、盛大な拍手の音が聞こえた……。劇場の幕が閉じる。観客が帰る。

「世界が点滅。点滅、果して真暗に。」

ナニモカモが無くなつたような曖昧な世界になつた。

でも、客席からはモウ見えない、高台には、彼女と彼の死体だけはちゃんと取り残されて、存在を確認できた。

@：『再開』は面倒だから流れた

「ハツ！－！」

私は目を覚ました。目の前には、見慣れた、顔のような模様がある低い天井があつた。

時計を見た。午前8時、日時は9月9日。時間の飛んだ日に戻っていた。いや……これは。

「あれは夢だったのか……」

玄関には洗濯はされたが使われずに、埃をかぶつている衣服が大量に、かごに詰まっていた。

私が布団から出ると、ごとごと、物音が押入れからした。何事だろうと、私は開ける。すると、物音の正体は、額がぱっくりと割れた雅貴の首だった。私はそれをゆっくり持ち上げる。

腐り終りゆっくりと乾きつつある彼の瞳に映る、自分の笑顔を見た。

そして私は彼を脇に抱え、四畳半を出た……

有機的な胎動を繰り返す階段は、踏みしめる「」とに卵管から卵を

産んだ。

卵は気が氣でないキミドリ色をしたアスファルトの雑草に受け止められて二ヶ月後に新しい階段の赤ちゃんが孵化した。

二人はテクテクと、国道さんさんさんよん号線を跨いだ。  
またがれた国道5さんななななな7号線は桜が咲き乱れて  
火山が噴火した。

咽喉が渴いた二人は公園のミズ飲み場でミズを飲んだ。

ポチヤンと漬けられた雅貴の断面から新しい雅貴が生えてきた。  
私はその雅貴だけを選別し、今まで持つてきた雅貴を土に埋めて  
ミズをあげた。

背後ではナニカの叫び声が聴こえたが、私と雅貴はテクテク歩いた。でも木製のマジックハンドに捕まえられてしまった。

ちくたくちくたくと叫ぶ、構造上開かないのだけれども開く柱時計の針。四本の時を刺す針。紙次元を突き抜ける！

チクタクマンがまた叫ぶ。針が、叫ぶ。四本でありながら、無機物の有機物的なコーラグリットの数学的なアーマメンツなのだからっ！

アーマーを装着した私。  
私に装着されるアーマー。

雅貴は私の頭の上でこの先どうするのかを考えていた。

どうするの？

私は核になつた。世界は私になつた。地球は私の子宮になつた。  
子供が生まれ、その子孫が増える。そして絶滅する。死んだ、生きた、繰り返す、ああはいいでありながらめぬであるのだった。あ

あああ。

果してその後も一人は幸せに暮らしましたと。此れはハッピー  
エンド。

『終幕、幕閉じ 拍手が鳴り止まない』

『スピーカ音量を下げる』

『BGM、SE切る』

『再開幕』

『やっぱり、私がおかしいのかなあ……』

@：世界が震えている

「ハツ！！」

私は目を覚ました。目の前には、見慣れた、顔のような模様がある低い天井があつた。

時計を見た。午後12時30分。日時は9月9日。布団は血で染まっていて、洗濯物は玄関ではなく、私の足元にあつた。ブルーバックとカーテンからの木洩れ日で目を覚ました私は、少々、ボット、考えていた。

「あれは夢だつたのか……」

携帯電話を探し出す。染め布団の下にあつた。新着メールがあり、『クビ』との題名だつた。内容も、案の定だろう。だから開けることはしなかつた。

私は電話帳から、雅貴を呼び出す。電話の奥で、彼の着メロが鳴つた。

「『人おーの心を胸に秘め 終末の時いーに涙うブツッ』……もしもし晶。俺ですが何か」

「……うえうえ……」

「そうかそうか。イワンでも分かる。イワンはロシアンです。嗚呼ア、でもシベリアにペンギンはいないなあ」

「あい、ペングイン ッ！」

「これはいい発音だ」

「ペンギンって、誰のこと？ あたし？」

「誰だってキミ、この前や。一ヶ月前か。掃除してやつただろう。

その前の日、キミが家「つか」の銭湯で溺れたよなあ。

そしてのぼせたお前をソコに連れて行つてそして……」

「あ

「思い出したか」

「うん……まあ……」

「そうかあ……じゃあ、とりあえず喜べ。俺は、今、暇だ。そつ

ち行つてやるわ」

「え、来るの？」

「嫌か？ キミは絶対『一人でさみしいんですね』って言つん

だろうと思つたんだが」「

「いやいや、嫌じやないわよ。そうね。じゃあ、お願ひ、来てち  
ょうだい。ちょっと、おつかない夢見てさ？」

「ほほ」

「でも、車に氣をつけね。絶対だからね」

私は通話を切る。本来と矛盾している。

「私はあの時絶対に、この部屋で寝ていた。深酒で、一日酔いをしていたのだ。断じて銭湯に入つていない。

だから、彼は前日、この部屋に来ていない。

あたしと雅貴が、一緒に掃除をしたのは、あたしがその前日に、  
彼に電話で頼んだからだ。だのに……どうして……」

私は、自分の頬を抓つた。つめの跡がつくほど力強く抓つた。と

ても痛かった。痛みは現実だ。

「これは夢ではない。現実だ。だから思い違いだ。だつてあのと  
きあたしは一日酔「ふつかよ」つていたんだもの。記憶が飛んでい  
ても、おかしくは、ない……」

ゴトリ。

突然、押入れから物音がした。それに私は、薄い布団を被つて震  
えることしか出来なかつた。

程なくして、雅貴が来た。私は震える指で押入れをさした。雅貴  
は、勇氣を出して、押入れを空けた。

どさりと重量感のある音とともにころげでたそれは、一升瓶ほど  
の大きさの真っ白なねずみの死骸だつた。

あの、天井にいたねずみだろうか。その証拠にもう、天井からは  
物音一つしなかつた……。

雅貴はそれを、丁重に葬つた。

アパートの小さい庭に、スコップで穴を掘り、そこに埋めた。

私は彼の後ろで、その一部始終を見ていた。

雅貴によつて埋められているねずみ。ねずみのウツロな目は、私  
の方をじっと見ていた。

そしてその眼差しが『やあ楽しめたかい。でももつとたのし  
い事が起こるはずだよ、そして此れからね……』と言つた様な  
気がした。

雅貴はせつせとねずみを埋める。死んでいるねずみが私に向けて  
いた右目もナニモカモが、暗い土の中に埋葬された。

次第に、太陽はさら傾いていった。青っぽい夕闇に、二人とねず  
みの塚は照らされていた。

私の頬に、ばんそうこうが張つてあつた。血が出ていたので、ねずみを埋める前に、雅貴が張つてくれたのだ。

事を終えた二人は水道で、手を丹念に洗つた。

私は、今までのおつかない事が水によつて洗い流されていくよう感じた。

私は咽喉が渴いていた。そういうえば起きてから、一口も飲み物を飲んでいないのだ。

勢いを弱め、蛇口を上に向け、水を飲んだ。夏の終わりの水道水は生ぬるく、鉄の味がした。

雅貴が手ぬぐいを出してくれたので、それで手を拭いた。ついでに顔も洗つた。えらくさつぱりした。

それもそのはずだ。この暑いのに私は風呂に、3、4日入つていなかつたのである。

「まず家「うち」に来て、風呂入れ。その際だから、ご飯も食べていい。ラーメンをつくつてやるしヨーグルトもあるぞ。

今日は親がいないが、泊まつて行くが宜しかろ?。番台はぬこさまのお立ち台だから気にするな。

だが、俺はキミを襲いはしない。何故なら俺は、狩野雅貴だからだ!!」

「ふふふ……、気に食わないけど、やつせさせて貰つとするわ……」

@・・クライマックスだぜ！

二人は淡い青「ゆづ」やみを扇ぎ、双方同時に溜息をつき、双方同時に互いの手を握つた。

そして私は思った。

「じいつとなら、何があつてもやつていけそうな気がする。

じいつけ、なにがあつてもあたしの傍にいてくれる。

「そんな時代にいつたって、世界が変わったって、死んでも死んでいなくても、あたしと雅貴は共にいるんだ、否、あたしがそうさせてやるんだ！」

その決意は固かつた。玄武岩より固いダイヤモンドの硬度でなお、こんなにやぐの柔軟さを持ち合わせていた。

だが、だいたいのSFでそういう決意をすると、その決意を打ち

さて、この世界「モノガタリ」はどうだらう。

ゴゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

嗚呼ア、ヤハリ予期した突然であつた。思えば叶う、この不思議。  
いや、願つてもない事だ。幸福至福不快絶望阿鼻叫喚地獄殺戮磨瀆  
五語後 g( r y . . .

育やみの向いへ、もと来た私の下宿から、警笛カイ爆音が響きわ  
たつた。

ぼろい屋根を衝きぬけて、それは顯われた。その大きさたるやも、発する轟音に負けず、超越的に、超超弩級だった。

女の願いが叶つた先の答え、

神の身代わりで在らせられるデウス・エクス・マキナの手による  
階段の全エスカレータ化に秘められた謎にせまり、  
死神のカマとチーズカマボコの接点が明かされ、やはりうめられ  
ていた宇宙人の秘密兵器か、

はたまたS.F的に考えて質量保存の決壊であのハヤシやヤシヤン  
となんとの大騒ぎも、などなどそんなこんなを思い起しかせる、

今まで見たこともない奇怪な流派の巨大な門

れが現われた！

押入れの周囲を環状本棚が廻る。早川文庫が踊り、創元文庫が宙を駆けた！

世界の調律が完全に発狂し途切れ碎けてしまう。操っていたピアノ線はすべて千切れ飛んでつた。

弾ける黒塗りの箱、鍵盤すらも、卑しい難民の使う割り箸となるだろう。

ぬめぬめ粘液を滴らせる、その押入れは何とかそいつ等を押しとどめてはいたが、もう限界だった。

いまこそ真の邪悪を解き放とうとしていた。

襖が内から叩かれる、ぎちぎちと軋む、撓〔たわ〕む、張り裂けんとしている！

いあ！ いあ！ 外なる神「アウター・ゴッド」、顯現し給え！

嗚呼ア、狂気に犯される、闇黒に充ち満ちる、邪悪に塗りつぶされる、遙かな銀河船団浮かぶ、永延の無窮の空を、見上げていた二人。

残酷の競演の見物に飽きた晶と雅貴は双方の顔を確認し、ニヤリと笑い、キスを交わした。

最愛の一人は幸せの絶頂。興奮で、世界が塗「まみ」れる。

塗れた興奮が繋ぎとなり、世界が再構成する、完全再生。

復活した世界は彼女たちの自由になつた、二人の「一人だけによる二人のための、スープの世界を、メンの世界を、嗚呼ア ワリバシの世界を！

相次ぐ次元連結爆発が祝電披露の病的な彩色の花火を挙げた  
バンバン！

人々の狂乱の叫びが祝辞を届けた。あらゆる生命の事切れる音は

鳴り止まぬ拍手だ 美しい！

そして門の頭に引っかかった階下の住人だけが、一人だけの結婚式を見届けていた。

終いには誰かの見えない手により、襖は開かれ、世界が、銀河が、外宇宙が、次々あふれ出る……。

『其処でも抱き合つた私と雅貴の二人が居た。  
其処では男の私と女の雅貴が抱き合つていた。

ある処では少女の私と雅貴が手を繋いで夕陽を見上げていた。  
しかしながら場所では私は雅貴の娘だった、その逆も然り。  
別の場所では最早人間ではなかつた。また違うところでは、生物ですらなかつた。

精神も無い、虚無なる存在でも、私たちは愛し合つていた。

『其れ 愛は永劫なり。眞実の其れは消え去る事無く、超次元的に存在化する。

具現化され、家電粒子となり、宇宙の始めから終わりまでの間を周回する衛星なればこそその事。

『其処はアラユル場所「エリア」の、二人が集まる駅のターミナル。

最愛なる二人よ、永遠になりて、其処へ集え。  
集い集つて見せ合い魅せられ愛し合い去り合つて、永劫のぐるぐるを続けるよ、阿呆ども……』

『いつたん閉幕、私息を吸う／自作の台本を読む そして以下演説』

@・私の主張

『叫べ、愛するものの名を！

そして絶望せよ、絶望すらも滅するコノ世界の中で！  
しかし、希望せよ！

意志の力が支配する、コノ世界で！

一緒に居たい、共に生きたい、相思相愛の恋人を！

嗚呼アアア 憎い、私は憎悪するぞ！

『私は憎い

私は彼と共に歩めなかつた

私は彼と共に居たかつた

私もコノ世界で、意志を持ち、彼と出会いたかつたのに……  
それを出来たコノ世界を憎悪するぞ！

『そうだ、コノ物語は、嫉妬だ

私が掴めなかつた未来への、在り得なかつた明日への、嫉妬だ

『醜惡の塊である私の、すごく意地悪な私の

その私の、美しく綺麗な奴等に与える手前勝手の、試練だ

『越えて見ろよ、コノ世界の、晶と雅貴  
二人で生きて、必ず添い遂げろよ

『それが、

私の 私が私の臨む『晶』として、  
存在したかつた、アラコル世界への だ

『ああ！ ああ！ いざ、開かれよ、アラコル事象よ、事態よ、  
顯現し給え、外なる神！

『嗚呼ア 爛れた未来を掴んで唯一途に滅び逝けよ、いあいあ

！』

@：ポルツクスアーマメンツ、意味ワカラん言葉使うな！ ポ  
コッオ！

『BGMはフェードアウトし、画面も徐々に暗く暗くなつていぐ

『この白文字ももう少しで、消える』

『私の言葉も消える』

『存在が、消えていく』

『あ』

『そ』

『だ』

『貴方は、ゲームをクリアしました』

『おめでとう、おめでとう、おめでとう』

『ここで拍手のBGMを鳴らす』

『パチパチ』

『パチパチパチ』

『パチパチ』

『パチ』

『そしてウインドウの内には黒い闇だけが残る』

『一瞬、思考停止』

『再開』

『何か現われる』

『ゲームクリアの文字だろうか』

『再び、何が、再開幕かしらん』

『あ、おわり』

『だそうですば』

劇場は盛大な拍手が飛び交い、母の隣に座っている少女の『私』の瞳には、涙が溢れていた。

こんなにもおもしろいモノがこの世にはあったのか、そんな事を考えるマセガキがそこに居た。

瞬きは一瞬……そして、瞼を開けると視点は変わり、私は大人になっていた。

観客は、誰も居ないが、ただただライトアップされた舞台。其処に魅せられる私。私も舞台上に立ちたい。舞台が私を呼んでいた……。

私は少女であつた、これからも少女であり続けるのだ。  
永遠の舞台で躍る、永遠の少女となつた……。

誰も居ない客席を前に、延々と劇を続ける、道化となつた。  
道化は挽歌を語る　　それは在り得ざる明日への通告　　今だ見えない群雲の其処の深淵　　希望を物語る。。。。

### 《糸冬》

ザツザツザツ

樹

海

ザツザツザツザ

トボトボ



(後書き)

つかれました  
ゲームのシナリヲになるはずでしたがお蔵入り  
いろんなモノにつかっています  
そう、いろんなものへね・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8499e/>

---

アラユル世界での彼女の嘆きの挽歌

2011年1月16日02時45分発行